



当研究所のベーベンロート准教授がドイツの週刊紙“Die Zeit”のインタビューを受け、3月17日付で記事が掲載されています。今回の東日本大震災の状況、被災地の人々の様子などについて、日本に住むドイツ人6名にそれぞれインタビューした記事となっています。大地震、津波、原発事故という恐怖や、日々あふれかえる情報に戸惑いながらも日本に滞在を続けると決めた人、震災後すぐに日本国外に移った人など、それぞれの立場から見た今回の震災はどのようなものなのか、知ることができます。

以下の文章は、その記事からベーベンロート准教授のインタビュー部分を抜粋し、本人が英訳し、当研究所のスタッフが和訳したものです。

東日本大震災と日本人の考え方

神戸大学経済経営研究所

准教授 ベーベンロート, ラルフ

(BEBENROTH, Ralf)

神戸の人々は歴史を 1995 年の震災前と震災後の 2 つに分けて考える。阪神・淡路大震災は衝撃的な出来事だった。今、日本は新たな大惨事の渦中にあり、神戸の記憶が蘇りつつある。なぜいつも地震は日本を襲うのだろうか考える人も多い。

それにもかかわらず、ここ日本では誰一人としてパニックに陥る者や、盗みを働く者はいない。東京においても、深刻な問題などなく、全てが順調だ。もちろん、被災地で電気やガスの供給がストップしたり、人々がスーパー・マーケットで水やカップ麺などを買いだめすることで、売り切れとなる商品が出たりすることもある。しかし、他には何の問題も起こっておらず、東北の被災者のために募金活動が盛んに行われている。

しかし、ドイツ人が日本人をのんきな国民だと思うならば、それは間違っている。日本人が大災害に慣れているのは確かだが、見えないところで日本人はストレスに苦しんでいる。地震が起きたとき、誰も内心穏やかではないにもかかわらず、他人に本当の感情を見せることなく、笑顔で振舞っているのだ。

私にはこの素晴らしい国を出て行く理由はない。私たちは福島を見守りながらこれよりも事態が悪化しないことを願うばかりである。